

る。OS-IV 帯でワタ、アブラナ科が急減あるいは検出されなくなるが、そのときに、スギの急増がみられる。さらに最上位 OS-V 帯でスギの拡大がみられる。これらスギの増加は、植林と考えられる。OS-IV 帯のスギの増加は、狭山池の流域である河内林業地のスギ・ヒノキの人工造林の開始によるものと思われ、その年代は、鶴谷 (1968)、大阪府 (1969) によれば、200-300 年前ごろの AD 1,700-1,800 年頃である。最上位 OS-V 帯でみられる第 2 期のスギの拡大は、第二次世界大戦後の拡大造林のものとして推定される。

渡邊ほか (1998) は、ため池堆積物を対象とした花粉分析を実施し、その中の一つとして狭山池を取り上げた。渡邊ほか (1998) は砂礫層 S10 以上の堆積物について花粉分析を行い、*Pinus (Diplo.)* 帯とし、さらに *Pinus (Diplo.)* 亜帯、*Pinus (Diplo.)-Cruciferae* 亜帯、*Pinus (Diplo.)-Cryptomeria* 亜帯の 3 つの亜帯を設定した。*Pinus (Diplo.)* 亜帯、*Pinus (Diplo.)-Cruciferae* 亜帯からはワタの花粉も検出されている。これらの花粉分帯は、筆者らの OS-III 帯以上の花粉化石群帯に対比される。

狭山池堆積物の花粉分析により、16-17 世紀からのアカマツ林の拡大と綿栽培の開始、18-19 世紀ころの背山でのスギの植林の開始と綿作の衰退、さらに第二次世界大戦後のスギの拡大造林の様子が復元できた。

引用文献

- 藤田憲司・古谷正和・渡邊正巳. 1991. 大阪府南部地域におけるアブラナ科花粉の高出現率期について. 日本文化財科学会第 8 回大会研究発表会要旨, 33-34.
- 日下雅義. 1980. 歴史時代の地形環境. 392pp. 古今書院, 東京.
- 大阪府. 1969. 河内林業. 1-2pp. 大阪府緑の環境整備室.
- 大阪狭山市. 1988. 大阪狭山市史要. 402pp. 大阪狭山市役所.
- 武部善人. 1989. 綿と木綿の歴史. 288pp. お茶の水書房, 東京.
- 鶴谷和三. 1968. 河内林業. 林業広報誌「山」. 2pp. 大阪府森林育成課.
- 内山 高・兵頭政幸・吉川周作. 1997. 溜池堆積物の古地磁気年代測定. 第四紀研究, 36 (2): 97-111.
- 渡邊正巳・那須考梯・木村友美. 1998. ため池堆積物を対象とした花粉分析. 第四紀, 30: 57-64.
- (*〒 657-8501 神戸市灘区鶴甲 1-2-1 神戸大学大学教育研究センター Research Institute for Higher Education, Kobe University, Tsurukabuto, Nada-ku, Kobe 657-8501, Japan. **〒 657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1 神戸大学大学院自然科学研究科 Graduate School of Science and Technology, Kobe University, Rokkodai, Nada-ku, Kobe 657-8501, Japan)
- (1999 年 2 月 18 日受理)

書評 (新刊紹介): 西田治文著. 1998. 植物のたどってきた道. 221pp. 日本放送出版協会, 東京. 本体 830 円.

現在の植物群や植生の多様性を分類学や生態学の立場からまとめたものは多い。しかし、やはり、多様性の歴史を化石の記録をもとにしてまとめたものは、とりわけ日本では少ない。研究者が著しく少ないことにもよる。そんな中で、著者西田治文は、その道の恩師と仰ぐ西田誠を父とする。陸上植物とりわけ維管束植物の初期の進化系統の開拓者西田誠を紹介するまでもないが、昨年秋あの世に旅立った。希少な分野の希少な関係である。本書は、植物化石の研究すなわち古植物学から導き出された陸上植物の進化の研究の 20 世紀における到達点を明快に語り、21 世紀への指針を示している。

本書は、第 1 章被子植物は裸子植物の一部にすぎない、第 2 章植物は淡水から上陸した、第 3 章 4 億 5 千万年前の植物大爆発、第 4 章地球最初の森、第 5 章種子植

物の誕生、第 6 章地上の覇者となったシダ植物、第 7 章裸子植物天下を取る、第 8 章裸子植物にも花と果実があった、第 9 章“花の時代”の幕開け、からなる。

植物の陸上への適応は、胚をもつ、維管束をもつ、種子をもつという「革命」によって達成されてきた。著者のとらえ方の特徴は、多くの研究者が現在繁栄する被子植物を中心に捉えるのに対して、その前段階も同様に、いやそれ以上に重点を置いているところにある。被子植物だけが花をもつ植物ではないとの考えに表出する。

著者の調査体験が豊富に語られ、難解とされてきた植物の進化系統論の理解を助ける。植物多様性を理解するための好著である。

(辻 誠一郎)